

精神障害者自身のストレングス活用に向けたアセスメント・ツールの開発

—地域生活定着支援の当事者との協働から—

○京都府立大学大学院 山東 綾乃 (008524)

キーワード：地域生活定着支援、ストレングス、アセスメント・ツール

1. 研究目的

近年、精神障害者の地域生活支援では、ストレングス視点の重要性が強調されている。しかし現実に、支援の要となるアセスメントの局面では、精神障害当事者が自分の望む生活にむけて必要なストレングスを理解し活用できていない。そこには、①支援者によるストレングス情報の言語化の問題、②当事者自身の理解の不十分さ、などがある。そこで、こうした問題意識と研究課題から、これまでの研究では、精神障害者自身のストレングス活用に向けた新たなアセスメント方法の必要性を提起してきた。とくに昨年度は、支援者へのヒアリング調査から、支援者が継続的にストレングス情報を当事者と共有しながら、当事者本人の活用を支援するアセスメント展開を明らかにしてきた(2015年度 社会福祉学会秋季大会)。しかし、そこでは具体的な方法や実践展開に課題が残った。それは、①当事者と支援者がストレングス情報を視覚的に理解し、その理解や考えのずれをすり合わせるための円滑なコミュニケーションや共通認識の醸成と、②支援プロセス全体での協働を導き出すことのできるツールの開発である。

そこで今回の報告では、昨年度の報告をふまえ、地域生活定着支援にかかわる支援者と精神障害当事者へのヒアリングをとおして、精神障害者自身のストレングス活用を促進するアセスメント・ツールを開発し提案したい。

2. 研究の視点および方法

今回のアセスメント・ツール開発の方法には、①アセスメント項目となるストレングス要素の精緻化、②開発プロセスへの当事者参加、が大前提である。そこでまずは、先行研究から整理したストレングス要素の検証を、2014年度に報告した京都府の事業所2ヶ所の5名に加え、同様の調査方法で2014年3月～6月に、精神障害者自身が活躍するという視点から先駆的实践を行う北海道、埼玉県、鹿児島県の事業所3ヶ所の支援者6名に協力を得て行った(詳細な調査方法は、2014年度の社会福祉学会秋季大会の抄録参照)。

そして、その検証結果をふまえてアセスメント・ツールのたたき台を作成し、2016年2月～3月には、当事者と一緒に内容項目や表現の検討及び推敲作業を試みた。このツールのプロトタイプ版は、①当事者のニーズの反映、②当事者本人の活用可能なツール、を強調したものになっている。そして次には、その活用可能性や妥当性を考えていくために、定期的なかかわりのある京都府の事業所に通所する20歳代～50歳代までの当事者で、かつ支援者が地域で安定した生活を継続していると認識している3名と、アセスメント・ツールのたたき台を検証した。具体的には、①構成内容の妥当性、②質問内容の理解しやすさ、について対話形式で検討を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、社会福祉関連学会の研究倫理指針を参考に、配慮を行っている。とくにヒアリング調査では、調査対象者に研究の目的や方法、成果の公表方法、個人情報保護等の倫理的配慮や、調査対象者の権利について文章で示し、同意書を取り交わしたうえで実施した。また得られたデータ等の管理を徹底し、それらを取り扱う際には細心の注意を払った。なお、本研究は、所属する京都府立大学の倫理委員会からの承認を得て実施した。

4. 研究結果

まず、これまでの先行研究と今回の支援者への調査から、130のストレングスの「実践構成要素」を抽出した。また、アセスメントの内容や構造を可視化するために、「実践構成要素」の類似性・相違性から、38の「構成要素内容」、11の「構成要素」、2つの「領域」、に順次カテゴリー化した。次には、先行研究やヒアリングの内容を意識しながら、アセスメント内容にあたる130の「実践構成要素」を質問形式化し、アセスメント項目を入れたシート（プロトタイプ）を作成した。そして、そのプロトタイプを用いて、①「実践構成要素」の妥当性と新たな要素の抽出、②「質問項目」の理解しやすさ、の2点を中心に、精神障害当事者への対話形式的なヒアリング調査を試みた。その結果は、次のとおりである。（なお、詳細は当日の資料で示す予定。）

- (1) 地域生活定着支援のアセスメント項目となる精神障害者のストレングス要素の明確化
 - a. 帰納・演繹的な手法によるストレングス要素の可視化と、「領域」から「実践構成要素」への階層的な構造化
- (2) アセスメント・ツール開発における当事者との協働の意味
 - a. 当事者のニーズや価値、あるいは当事者の視点にみる障害特性や地域生活の実態を反映させたアセスメント項目の設定
 - b. 当事者の理解できる表現や言語、回答しやすい質問方法など、当事者の使いやすさを意識したアセスメント項目の活用方法
 - c. ツールの作成から活用までかかわることによる当事者へのエンパワメントの効果
 - d. 支援プロセス全体への強い当事者参加を可能にするアセスメント・ツール開発の可能性

5. 考察

今回の研究では、精神障害者本人のストレングス活用にむけたアセスメント方法の構築にむけて、支援者と当事者とともに、プロトタイプ版アセスメント・ツールの開発を行ってきた。その結果、次の3つの成果を示すことができた。

- ①地域生活定着における固有なストレングス要素の可視化と精緻化
- ②当事者との協働によるアセスメント・ツール開発の意義
- ③当事者参加を可能にするアセスメント・ツールの実践活用の可能性

しかし一方で、今回の調査は、プロトタイプ版アセスメント・ツールの開発であり、その可能性を示したにすぎない。そのため、実践で活用可能なアセスメント・ツールという点では、次の2つの課題が残されたと認識している。

- (1) 継続した精神障害当事者との協働によるアセスメント・ツールのさらなる精緻化
- (2) 実践場面での当事者・支援者によるアセスメント・ツールの試行をとおした検証